

# ひかりのこ

1月園便り

聖ミカエル幼稚園  
2016年1月21日

月主題：いっしょに

『みんなに守られて大きくなる』

皆様、新年、明けましておめでとうございます。今年も、聖ミカエル幼稚園をどうぞよろしくお祈りいたします。

今年の冬はなかなか雪が積もらないので、冬休みのお預かりはそり遊びが十分できず、本当に残念でした。それでも、幼稚園に来た子どもたちはほっぺを赤くして、のびのびお外で遊んでいました。子ども達がお預かりをととても楽しみにして登園してくれるのが、大変嬉しいです。

さて、私は、1月8日に町内会の新年交礼会に出席してまいりました。毎年ご案内をいただいていたのですが、1年目は、何もかも新米だったため仕事に追われ余裕がなく、2、3年目は新制度準備のため会議続きで、やはり余裕がなく顔を出すことができませんでした。やっと4年目、「いつもお世話になっているご近所の皆様に御礼とご挨拶を。」と出席のお返事を出し、行ってまいりました。連合町内会の役員さん、地域の小中学校の校長先生、教頭先生、保育園、幼稚園の園長先生など、たくさんの方々がお集まりで、たいへん和やかな会でした。私も3歳から、27歳まで、幼稚園のすぐ近くに住んでおりましたので、緊張するというより、なんだかとても懐かしい気持ちになりました。

沢山の方がお声をかけてくださいました。60代以上の方が多く、私よりも教会や幼稚園のことをよくご存じです。

「ほくね、子どものとき、昔いらっしゃった、タッカー先生の奥さんによくクッキーいただいたんだよ。」「ほくも聖ミカエル幼稚園を出たんだよ。吉井園長先生によく遊んでもらったよ。」「昔は小さい教会だったんだよ。教会も幼稚園も年を重ねながら、立派になって行って嬉しいよ。」「大友先生（以前ミカエル教会にいらした司祭様）、お元気かい？」「三澤先生（やはり以前の司祭様）、うちのすぐ近くに住んでいるの。まだまだお元気で嬉しいよ。」

また、連合町内会の会長さんは、「いつも、幼稚園の子ども達の元気な声にこちらでも元気をもらいますよ。何か困ったことがあったら、いつでも言ってくださいよ。」とおっしゃってくださいました。

改めて、聖ミカエル教会と幼稚園は、地域の方々の温かい目に支えられ、守られてここまで歴史を紡いできたのだ、と感じました。子どもは、親だけで育てるものではありません。血のつながったおじいちゃん、おばあちゃん、幼稚園や保育園の先生、そして近所のおじさん、おばさん、おじいちゃん、おばあちゃん、お兄ちゃん、お姉ちゃん、みんながいる

からこそ、豊かで、しなやかな心が育っていくのだと思います。そして、「自分は大切にされている。」という自己肯定感は、成長の過程で、人生の壁にぶつかったときに大きな力となります。この地域に住む子ども達が、みんな愛されて、すくすく大きくなってほしい、と心から願っています。

園長 渡部良子

## キリスト教保育

新しい一年が始まりました。今年も子どもたちの健康が守られ、幼稚園で楽しい毎日を過ごせますようにお祈りいたします。特に、3月に幼稚園を巣立って行く年長クラスのお友だちには、楽しい思い出をたくさん作って欲しいと思いますし、月曜日の礼拝も残りわずかですので、イエス様のことをしっかり心に留めていただければ幸いです。

いつも礼拝の時に感じるのですが、ミカエル幼稚園の子どもたちはしっかりと大人の話を聴いてくれます。入園してから卒園まで、毎週の礼拝でお話を聴くだけでも、他の幼稚園よりも聴くことの訓練になっていることは確かです。また礼拝の機会にとどまらず、きっとそこには先生たちの、子どもたちの心を聴こうとする保育の積み重ねもあるはずです。聴いてもらえる安心感と喜びがあってこそ、相手のことを聴ける人になっていくのではないのでしょうか。

他者との関係の中で、聴くことはそれほど簡単ではありません。聴くことは理解することであり、相手を受け入れることです。そのためには自分の主張を保留して相手を待つこともあります。言葉の上辺だけでなく、その奥にある意味を訪ねようとすることでもあります。それがあって初めて人との関係が成立するのですが、そのような高度な業にもかかわらず、こどもたちは幼稚園でちゃんと身につけていきます。

私が礼拝の中で語る一つひとつの言葉を待っていて、その意味を真剣に、一生懸命に探ろうとしている、キラキラ光るこどもたちの目はまさに宝石の輝きです。その輝きを失わずに成長して欲しいと願います。

チャブレン 下澤 昌